

## 郷土文学論争 (1930～32) について

松 永 正 義

1930～32年、黄石輝、郭秋生らの台湾話文（台湾語による口語文）による郷土文学の創作の提唱をめぐって行われた郷土文学論争は、台湾文学が大陸における文学の流れと離れたところでの独自の課題を意識しはじめた最初の論争として、また、台湾におけるナショナリズムが、中国—台湾という重層した構造を持つものとして形成されはじめたことをあらわに示した最初の論争として、台湾文学史上重要な位置を占めるものであると思われる。

では、この論争はこれまでどのように位置づけられてきただろうか。いま、ここにその位置づけの方向性の違いを端的に示すものと思われる二冊の文学史がある。一冊は葉石濤『台湾文学史綱』<sup>1)</sup>、もう一冊は白少帆ら編著『現代台湾文学史』<sup>2)</sup>。

葉石濤は、黄石輝、郭秋生らの主張を、「台湾という植民地社会の特殊な環境と時代の需要に深く根をおろすところからはじまった」ものであるとし、そこに、大陸の白話文運動を離れた、台湾自身の「自主的」な文学観念の形成を見る。そして、1895年の植民地化以降の巨大な社会の変化を考えるならば、台湾の新文学運動が「自主性」の道を歩みはじめたことは、正しくかつ不可避の道であった、と述べている。葉石濤は本書の最終章で、1980年代に入っはじめて、大陸と異なった「濃厚な地方的色彩と特有な創作使命」を持つものとしての「台湾文学」という概念が確立された、と述べているから、郷土文学論争はいわばそうした意味での「台湾文学」の概念を自覚化しはじめた最初の段階に位置づけられることになる。

一方白少帆らは、「黄、郭の二人が、新文学は民族の立場に立ち、労農大衆

に直面すべきことを主張し、民間文芸を重視すべしとした意見は、積極的で、正しく、肯定すべきものであった。ただ、中国語の共通語としての白話文に対するその見かた（中国白話文を否定して台湾話文を主張したこと——引用者）は、視野が狭く、一面的であり、廖毓文、林克夫、朱点人ら多くの新文学作家の反論を受けた」とし、「論争の性質は新文学陣営内部の争いとすべきもので、異った風格の文学流派が、互に刺激しあい、互に合理的な文学思想を吸収しあったという点で、民族文学の発展をおし進める進歩的な意義があった」と、評している。

白らのこうした評価は、台湾におけるナショナリズムの構造を全く理解しない、ないしは政策的見地からそれを否定しようとする大陸における台湾文学研究の通弊をもっともあらわに示すものであると思われる。ここにいわれる「民族文学」の概念は、「抗日」という側面に限定して受け取るとすれば、うなずける点がないでもないが、ほかならぬその「民族」の概念の分裂を明示しはじめた郷土文学論争を概括する語としては、あまりに不用意に用いられている。それが葉石濤のいう「自主性の文学」と鋭く対立する概念であることは明瞭であろうが、白らの書が、他ならぬ張我軍の評価に、葉石濤の該書を引用しておきながら、その延長線上に理解さるべきこの部分において、葉著の主張をまったく無視している態度は、まことに解せないものであるといわざるをえない。

わたし自身は、葉石濤による総括を、大すじでは正しいものと考えている。「自主性」のよってきたるゆえんを、情勢に強いられたやむを得ざる道であったと、いわばネガティブなかたちで表現している周倒さは、80年代の「台湾文学」の概念の確立を述べるにあたって、これを「中国文学」の一環として考えようとする主張のあったことをあわせて紹介しつつ、この両者は敵対すべきものではないとしている細心さとあわせて、いまの台湾文学の状況のなかで、あたうかぎり客観的であろうとする均整のとれた態度と思う。

だが、葉石濤は郷土文学論争をとりあげるに際して、廖毓文らの反対論（中国白話文の主張）についてまったく触れておらず、それゆえ論争全体の意味するところについては、まだまだ考えるべきことが多く残されており、また、論

争中に現われた主張は必ずしも「自主性」という方向にのみ集約されるものとも思われない。総じて、郷土文学論争が、台湾文学が大陸における文学の流れと切れたところでの独自性を持たざるをえなかったことを明示するものであることは事実であるにしても、その独自性の内的構造をどのように考えるか、それを「自主性」というふうに総括できるのか、といった点については、まだ考えるべきことが多く残されているように思われる。

わたしは以前郷土文学論争について、①論争は白話文運動における民族の契機と民衆の契機のふたつの契機の矛盾としてとらえることができるのではないかと、②論争には大衆化の方向と本土化の方向のふたつの方向があったのではないかと、といったことを書いたことがある<sup>3)</sup>。ただ、その時にはおおざっぱなアウトラインを示すことしかできなかつたので、ここでは上記二点についてもう少し論争自体に即して考え直してみたい。それは葉石燾に対しては前述の疑問をもう少し具体的に提出することになり、白らに対しては、論争の意味するものは「新文学陣営内部の争い云々」といった程度に総括してすむようなものではないということを示すことになるはずだ、というのがわたしの目論みなのだが……。

さて、『伍人報』掲載の黄石輝の論文を起点に始まった論争は、『台湾新聞』を主要な舞台として行われ、『台湾新民報』『昭和新聞』『南瀛新報』等でも討論が行われたというが<sup>4)</sup>、このうち『台湾新民報』は復刻があり容易に見ることができるとは<sup>5)</sup>、他の新聞、雑誌は、わたしはまだ見ることができないでいる。ただ、ここに関連する文章の切り抜きのコピーがあり、それで論争の一部は読むことができた。以下にとりあえずそのコピーのリストを掲げておく。切り抜きは掲載誌紙や掲載年月日の注記の有るものも無いものもあるが、注記のあるものは注記の年月日順に、無いものは作者ごとに一括して挙げておく。

①黄石輝「怎樣不提倡郷土文学」(『伍人報』1930年8月16日～9月1日)

②黄石輝「再談郷土文学」(『台湾新聞』1931年7月24日～?)

③郭秋生「建設『台湾話文』一提案」(『台湾新聞』1931年7月?～?)

④毓文(廖毓文)「給黄石輝先生——郷土文学的吟味」(『昭和新聞』1931年

8月1日、8日）

- ⑤黄石輝「我的幾句答弁」（『昭和新報』1931年8月15日、22日、29日）
  - ⑥点人（朱点人）「檢一檢「郷土文学」」（『昭和新報』1931年8月22日、29日）
  - ⑦黄純青「台湾話改造論」（『台湾新聞』1931年10月15日～27日）
  - ⑧劉魯「幾句郷土話」（『台湾新聞』1931年12月14日）
  - ⑨小野西洲「台湾語改造論を讀みて」（『語苑』1931年11月15日）
  - ⑩毓文「郷土文学的檢討——再給黄石輝先生」
  - ⑪点人「檢討『再談郷土文学』」
  - ⑫黄石輝「再答毓文先生」
  - ⑬同上「和点人先生談枝葉」
  - ⑭同上「給点人先生——為郷土文学問題」
  - ⑮同上「郷土文学的再檢討——給克夫先生的商量」
  - ⑯同上「对『台湾話改造論』的一商榷」
  - ⑰楊磧鵬「台湾話改造問題」
- ついでに、『台湾新民報』紙上の関連文章のリストも挙げておこう。
- ⑱克夫（林克夫）『郷土文学』的檢討——讀黄石輝君的高論」（377号、1931年8月15日）
  - ⑲郭秋生「建設『台湾話文』一提案」（379、380号、1931年8月29日、9月7日）
  - ⑳同上「讀黄純青先生的『台湾話改造論』」（389、390号、1931年11月7日、14日）
  - ㉑黄純青「与郭秋生先生論台湾話改造論」（391号、1931年11月21日）
  - ㉒郭秋生「台湾話文的新字問題——謹呈黄純青先生」（392、393号、1931年11月28日、12月5日）
  - ㉓林鳳岐「我的改造台湾郷土文学的提案」（393号、1931年12月5日）

また、1932年1月に創刊された雑誌『南音』は、台湾話文派の実践の意味あ  
いも持って創刊された雑誌で、毎号「台湾話文討論欄」を設けて討論の場を提

供し、また「台湾話文嘗試欄」を設けて実作を試みているが、討論の大部分は新字問題（台湾語表記にあたって新しく漢字を作るかいなか、またどのように作るか）をめぐるものなので、ここにリストを挙げることはしない。ただ、中に

②負人（莊遂性）「台湾話文雜駁」（『南音』1, 2, 3, 4, 7号, 1932年1月1日, 17日, 2月1日, 22日, 5月25日）

は、上記のリストに含まれていない論文を多く取り上げている。例えばこの論文で批判的に取り上げられている廖毓文、朱点人、林克夫、頼明弘らの論文は、台湾話文反対派（中国白話文派）の主張を知るためには重要なものと思われるが、上記のリストには含まれていない。また、廖毓文が、黄石輝と林克夫、廖毓文、朱点人らとの論争に次いで、頼明弘と黄石輝、黄春成、莊遂性（莊垂勝）らとの論争がおこったと述べている<sup>6)</sup>ことから、上記リストの文章のみでは、論争の全貌をつかむことはできない、特に台湾話文反対派の主張はつかみにくいと考えられるが、いましばらくは、読むことのできた文章のみを手がかりに考えてゆくことにしたい。

さて、文献リスト①の黄石輝論文（以下○で囲った数字は、文献リストの番号を示す）である。黄のいう「郷土文学」とは、台湾語によって台湾の事物を描写する文学のことである。ただし、ここにいう「台湾語」とは、台湾住民の多数派である福建系台湾人の母語である閩南語のことで、客家語や高山族諸語は、とりあえずは含まれていない。さて、こうした郷土文学の提唱は、文芸大衆化のためである。黄はいう。「君は多数の大衆を感動激発させる文芸を書きたいのか？ 君は多数の大衆の心に、君と同じ感情を起こさせたいのか？ そうでないのなら、言うべきことはない。だが、もしそうであるのなら、君が支配階級の代弁者であろうと、労苦大衆の指導者であろうと、必ずや多数の労苦大衆を対象として文学を作らねばならない。」だが、大衆には深い学問があるわけではないから、大衆を対象とする文学は、ごく平易な、わかり易いものでなければならない。それゆえ、文言文（文語文）によるものは論外だ。また、大陸で行われている白話文（口語文）は、文言文よりはましだが、それでも台

台湾語を母語とする大衆には、わからないところが多く、字を読んでわかるときでも声に出しては読めない。さらにまた、白話文による新文学は、「完全に学識ある人々を対象とするもので、そこに真に大衆化された作品を求めようとすると、かえって旧小説にも及ばない」、「われわれの新文学もまた、みな貴族式のものだ」、「一步譲って、現在の新文学が、中国では大衆のものであるというにせよ、台湾でそうであるとはいえない」、それは大衆とは無縁の、新文芸趣味を持つ人の専有物となってしまっている。それゆえ、大陸に通用するかどうかよりも、まず台湾の大衆に読まれるような文学を作ることが先決なのだ。

黄石輝の主張はあらまし以上のようなものだが、ただ、黄は「台湾語」を「中国語」と全く別のものとして構想しているわけではない。黄はいう。「台湾語はただ台湾のみに通用するものとはいえ、その実中国全国と連帯関係を持っている。われわれが口でしゃべったとすれば、他省の人はもとよりわからないだろうが、文字に書けば、他省の人もわからないわけではあるまい。」ただし、黄はまた、「台湾語」を中国の他の方言と全く同レベルに考えているわけではない。廖毓文の「ある地方にその地方の文学があるのだとすれば、台湾は五州、中国は十八省の別があるのだから、その数だけ郷土文学がいるのか」という問い(④)に答えて、黄は「台湾は特別なのだ。政治上の関係から、中国の共通語を支配的な言語とすることはできない。民族上の関係(歴史上の経験)から、日本の共通語(国語)を支配的な言語とすることもできない。これは明らかな事実ではないか」、という。日本の植民地支配という事実が、台湾という地域を中国の他地方と異なったまとまりとして考えざるをえなくしている、というわけだ。だが、こうした考え方については後にまた考えることにしたい。

さて、こうした黄石輝の意見について、『伍人報』誌上で賛否両論の活発なやりとりがあったというのが(⑩)、いまそれらの文章は読むことができない。もっとも、『伍人報』は発禁を繰り返し、配布部数も数百から二千部程度であったという(⑫所引の廖毓文論文)から、論争の広がりには限られていたものと思われる。論争が大きな広がりを見せるのは、この論文の約一年後、『台湾新聞』に黄石輝、郭秋生の二論文(②、③)が相次いで掲載されてからである。

ところが、この黄石輝の二つの論文(①と②)の間には、大きな相異がある。というのも、②では①の主要なモチーフであった文芸大衆化の主張が影をひそめ、郷土文学の必要な理由は、「文学はことばを代表し、ある地方にはその地方のことばがある。それゆえ、郷土文学が必要なのだ」といったふうに説明されている。そして文章の半分以上のスペースを割いて論じられているのは、①には無かった問題、どのように台湾語を表記するかという技術問題なのである。そこでの黄石輝の立場は、台湾白話文を読める者が中国白話文にも通じ、中国人も台湾白話文が読めるようにして、中国人との交通を断ってしまわないようにしなければならないから、表音文字でなく漢字を採用すべきだ。その漢字も、できるだけ中国の白話文と共通性のあるような採用のしかたをすべきで、台湾独自の用法は最小限におさえるべきだ、というものであった。①の黄石輝が文芸大衆化論者であったとすれば、②の黄石輝はいわば台湾話文論の啓蒙者の位置におさまっているように見える。

この変化の背景として考えられるものはなんだろう。第一に考えられるのは、日本による弾圧ということだ。①と②の間、1931年2月には、台湾民衆党の結社が禁止され、指導者蔣渭水の死(31年7月)もあって、幹部の多くは大陸に活動の場を移して、組織は壊滅した<sup>7)</sup>。また、6月から7月にかけて、台湾共産党関係者の107名に及ぶ大量逮捕によって、台湾共産党も壊滅状態となった<sup>8)</sup>。こうした抗日組織の崩壊ののち、わずかに残されていたのは、もはや抗日組織ともいいがたい右派の台湾地方自治聯盟のみだったのである。また、『台湾新聞』という掲載機関の性格(一般新聞)への配慮もあったかもしれない。さらに、『伍人報』における討論が、黄石輝に議論の重点を変えさせたということも考えられる。いずれにせよ、『伍人報』が見られず、黄石輝の履歴もよくわかっていない現在では、どれも推測にとどまらざるをえない。

だが、黄石輝の第一論文の大きなモチーフのひとつとして、文芸大衆化論があったこと、また、第二論文の書かれた時点では、議論を文芸大衆化論の方向に深めてゆくのはごく困難であったろうことは、事実であろう。黄自身の意図はともかくとして、黄論文をきっかけとして台湾版の文芸大衆化論争が行われ

てゆく可能性は十分にあったのだが、情況の進展がそれを許さず、論争はもっぱら台湾話文の是非、また、台湾語をいかに表記するか、といった問題をめぐって、すなわち、郷土文学論争というよりも台湾話文論争といったほうがふさわしい方向に進んでいった、というのがわたしの仮説である。以下、黄の第一論文の背景を考えてみることで、この仮説をもう少し補強しておきたい<sup>9)</sup>。

①の掲載された『伍人報』という雑誌は、台湾共産党員であった王万得が、日本のナップとの連絡下に、1930年6月21日に創刊、『洪水報』、『明日』、『台湾戦線』など台湾人の手になるプロレタリア文学雑誌が輩出するきっかけとなった雑誌である。創刊号三千部刊行以来、しばしば発禁処分を受けながら、十五号まで継続した。全島に七十数ヶ所の配布網を持って、左翼文学青年、台湾共産党員の支持、寄稿を受け、ナップ、戦旗社、法律戦線社、農民戦線社、プロレタリア科学同盟、台湾大衆時報社等と密接な連絡を保っていたという<sup>10)</sup>。

黄石輝は、27年に共産主義青年グループの影響によって台湾文化協会が左旋回してのち、その高雄州支部代表となっており<sup>11)</sup>、『伍人報』から、民族主義者、無政府主義者が脱退してのちに①を『伍人報』に発表したものと考えられるから<sup>10)</sup>、台湾共産党の周辺にいた人物と思われる。

つぎに文芸大衆化というテーマについてだが、それは当時、世界的規模でのプロレタリア文学運動中の主要なテーマのひとつであった<sup>12)</sup>。ルナチャルスキーの論文を蔵原惟人が翻訳して自らの文芸大衆化論に援用し、それをまた杜国庠が重訳して、中国における文芸大衆化論の提起に援用してゆく<sup>13)</sup>、といった同時性のなかで議論は進行していたのである。

日本では、1928年の中野重治と蔵原惟人を中心とする激的な文芸大衆化論争が、同年暮のナップ再組織として結実し、以後のプロレタリア文学運動の隆盛へとつながってゆく<sup>14)</sup>。そして30年6月には、日本プロレタリア作家同盟中央委員会が、「芸術運動のボルシェヴィキ化」の方針の具体化として、「芸術大衆化に関する決議」<sup>15)</sup>を発表していた。この6月に、『伍人報』は創刊されているのである。ナップと緊密な連絡をたもっていたという『伍人報』の関係者が、こうした雰囲気と全く無縁であったとは思われない。

中国では30年3月に中国左翼作家連盟が結成されたが、その創立大会では文芸大衆化のスローガンが提出され、文芸大衆化研究会が組織されることになった。また、これと時を同じくして『大衆文芸』2巻3期(30年3月)が「文芸大衆化の諸問題」を特集、つづいて『拓荒者』1巻3期(30年3月)、1巻4・5期(30年5月)が、この問題を取り上げていた。

だが、黄石輝の議論の方向は、同時期の日本、中国におけるどの議論とも似ていないように見える。中野・蔵原論争は、もっとも芸術的なものこそがもっとも大衆的なものでなければならぬ、とする中野に対して、蔵原はこれを観念論ときめつけ、プロレタリアの芸術確立とともに、大衆への直接のアジ・プロのための芸術運動が追求されねばならないとし、議論は次第に大衆宣伝の問題から組織論へと移っていった。また、29年末ごろから文芸大衆化の問題は、プロレタリア・リアリズム論をめぐる創作方法の問題として再燃し、やがて「芸術運動のボルシェビキ化」を説く「芸術大衆化に関する決議」へとつながってゆく<sup>16)</sup>。黄石輝の議論が、こうした問題関心とは別の地点で書かれていることは明らかだろう。

では、中国における議論はどうか。そこでも、「多くの方言音(原文「土音」)を、無理に書き表わしたとしても、一部の人が読んでわかるだけで、かえって大衆化の範囲をせばめはしないか」、という陶晶孫の意見に対して、蔣光慈が、「五四運動以来の白話文運動はまだ成功していない。聞いてわからないのはもともと白話などではないので、それでは大衆への接近など語ることはできない。われわれは真の白話を用いなければならない」とやり返したり<sup>17)</sup>、あるいは銭杏邨が、「労農大衆の口語の形式へ近づく努力をしなければならない」と主張する<sup>18)</sup>など、黄石輝の議論とつながる発言があり、この問題が中国の近代文学にとって普遍的な、大きな問題であることを思わせるが、しかし、こうした主張はまだ断片的なものにとどまっており、30年の段階では議論の全体はまだ文芸大衆化の必要をさまざまな方向から確認するというにとどまっており、具体的問題のつっこんだ分析には到っていないように見える。五四以後の新文学を「貴族式」のものと批判し、大衆のことばによって眼前の事物を描くことこ

そが必要だ、とする黄石輝の主張は、むしろこの論文の約2年後に発表され、中国における文芸大衆化論争再燃のきっかけとなった、瞿秋白「普洛大衆文芸的現実問題」<sup>19)</sup>とこそ呼応するもののように思われるが、どうだろう。

ともあれこうして、黄石輝の論文は当時日本、中国を通じて普遍的に見られた文芸大衆化への切迫した関心におそらくは触発されつつ、しかし、台湾に固有の状況から出発した特有の議論として展開されていったものと考えられる。黄石輝の議論は、もちろん前述のように、のちの瞿秋白の議論などと通底する内容を持っており、それはこの問題が台湾、大陸を通底する構造のものであったことを示しているが、しかし、大陸では中国語は当然の前提とされえたのに対して、台湾ではそれは日本語による浸蝕という不断の脅威にさらされていた。そして、日本語の浸蝕をもっとも受け易いのが他ならぬ知識人であることを考えるなら、抵抗の基盤である民衆への注目がより切迫したものであったことは、容易に想像できよう。事実、黄石輝とならんで台湾話文の強力な提唱、推進者であった郭秋生の議論も、こうした危機感から出発するものであったと考えられる。

郭秋生は論文③で、1899年から1928年までの約30年間に、400万の台湾人のうち公学校（小学校にあたる）の卒業者はわずかに24万人<sup>20)</sup>、中学以上の学歴を持つものは1万人、といった数字を挙げて、「結局台湾人は現代的知識からの絶縁者にほかならない。いな！ 自己の最低生活を保障するための文字さえ持てないのだ」、という。教育が日本語でしか行われぬ以上、教育に望みを托すことはできまい。台湾人自身が自らの手で文盲をなくしてゆかなければならない。その手段として、郭秋生は台湾話文を提唱する。というのも、日本語はもちろんのこと、文言文も、中国自話文も、すべて台湾の日常のことばから離れており、言文一致していないからだ。文言文や中国白話文の体系とは異った、しかし漢字体系のうちにある台湾話文。それこそが台湾においてもっとも自然、かつ容易な言文一致の方途であり、台湾人に自らのことばを与える捷徑なのだ、というのが郭秋生の主張の骨子である。当時、こうした言語運動を軸とする啓蒙運動が、種々の弾圧に直面していたことを考えれば、郭秋生の

いただいていた危機感が切迫したものであったことは容易に理解できる<sup>21)</sup>。

さて、こうした郭秋生の主張は、黄石輝の主張とほとんど径庭ないかにみえる。だが、そこには重大な相異があろう。黄石輝が、大衆を動かせるような文学を書きたいのか、といかけるとき、そこには無自覚にはあれ作者の主体の問題がはらまれている。事実、黄石輝は他の論文(⑫)で、「プロレタリア文学は、多くの労苦大衆を対象とするのか、それとも前衛闘士を対象とするのか」、といった問いかけをも行っている。それは問いとしては陳腐な問いであるにすぎないかもしれないが、しかし、それが台湾という特殊状況のなかでの作者の主体のありかたを問うてゆく重要なトバ口であったことは疑いない。だが、論争はそうした方向には進んでゆかなかった。また、それを許すような状況でもなかった。

これに対して、郭秋生の論文からは、それが文学論としてでなく、文化啓蒙運動の視点から書かれていることもあって、こうした問いかけは出てこない。郭秋生の位置が、あくまでも啓蒙者の位置にあるからである。そこで問題となるのは、台湾話文採用の是非、またその具体的方途如何といったことがらであろう。そして論争はそうした方向で行われていった。

さて、こうして論争の内容を検討する順序となったわけだが、⑳～㉔は新字問題をめぐるいわば台湾話文派内部の論争なので、ここではおいておく。問題は廖毓文、朱点人、林克夫の三人による反対論であろう。この反対論については、廖毓文自身が後に簡にして要を得た要約を行っている<sup>22)</sup>。廖はまず反対論を、A郷土文学への反対、B台湾話文への反対、の二つに分ける。Aは、④に見られるもので、郷土文学は19世紀末のドイツで提唱されたもので、時代性、階級性に欠ける、また、黄のいう一地方のことはを代表するのが郷土文学だ、という言いかたも、文学の内実を規定するには余りにも漠然としている、といったものだった。朱、林もこの見解には同意していたという。

廖らが「郷土文学」に対置したのは、「歴史の必然性による社会価値を目的とする文学——いわゆるボルシェヴィキのプロレタリア文学」(④)だった。こうした論点は、台湾話文派がのちに「本土化」の方向を明瞭にしはじめた時

にあらためて問題とされるべきことであったかもしれない<sup>23)</sup>。だが、この論点は、廖の提出のしかたがやや筋違いであったこともあって、深められてはゆかなかった。議論が文芸大衆化論の方向へ行かなかったことも、この論点が立ち消えになっていった理由のひとつかもしれない。

そこで議論はもっぱらBの台湾話文への反対をめぐって行われていくことになった。廖らの反対理由は、(1)台湾語はまだ粗雑幼稚で、文学の道具となりえない、(2)台湾語といっても内実はさまざまな（閩南語と客家語の別があり、また閩南語内部にも種々の方言がある）で、規準を定められない、(3)台湾話文で書いたのでは、中国人は理解できなくなる、の三点に要約できる。総じて、「中国白話文を台湾社会に普及し、大衆に中国語を理解させれば、中国人も台湾文学を理解できる。これこそ最善の道ではないか」、というのが彼らの立場であった。

この両者の対立には、32年の大陸における文芸大衆化論争を想起させるものがある。この論争で瞿秋白は、こう主張していた<sup>24)</sup>。五四以来の白話文は、結局新式士大夫による新文言文となってしまうしており、大衆と絶縁している。革命文学もこの新文言文によって書かれているため、大衆は理解できず、それゆえ、大衆を反動的大衆文芸のほうへ追いやってしまうている。大衆のための文学は、大都市の新興階級の間に生まれつつある共通語を基礎として、聞いてわかることを基準に書くべきだ。このようにして作家は大衆のレベルに立ち、大衆とともに芸術を高め、新しい大衆のことは、新しい大衆の文芸を作ってゆくことができる。

これに対して茅盾は、瞿秋白のいう新しい共通語とは、実際のところはまだ各地方の方言の域を出るものでなく、文学の道具たりうるほどに表現力を持っていない。それゆえ、現在のところは五四以来の白話文に改良を加えてゆくしかない。また、大衆が旧小説にひかれるのは、それが生き生きした描写方向を持っているからで、聞いてわかるからではない。ことばの問題よりも、こうした描写方法の問題こそが重要である、と瞿秋白を批判した<sup>25)</sup>。

瞿秋白の主張が黄石輝らの主張に、茅盾の主張が廖毓文らの主張につながる

ことはいうまでもあるまい。(もちろんこの両者の間に直接の影響関係があるわけではない。むしろ両者が全く別の地点で別の時に同様の議論をしていることに、問題の根の深さを見るべきなのだ。こうした問題構造のどこを推せば、白少帆らのような総括ができるというのだろう。瞿秋白も「視野が狭い」ことになるのだろうか。) もっとも、そこにはまた重大な相異もある。

瞿秋白らの主張は、大衆のことばに即しつつ、そこに新しい共通語形成への展望を持っていた。それゆえそれは、ラテン化新文字という表音文字によって、方言を表記し、それを大胆に取り入れつつ、新しい共通語を形成してゆこうとするラテン化新文字運動へとつながってゆくのである。魯迅は、ラテン字でもかくも各地方の土語を書いてゆくべきで、その際には他の地方と意志が通じなくてもかまわない。問題はそれを特殊化するか一般化するかにあるので、今日大都市に形成されつつある共通語を整理、発達させて、土語のなかに加えてゆき、「この自然から生まれ、人工を加えたことばが一般に受け入れられていったとき、われわれの大衆語文はおおむね統一されたことになる」、と述べている<sup>26)</sup>。

台湾は、こうした共通語形成への展望から、日本の植民地支配によって強制的に切り離されていた。それゆえ、大衆のことばに即することが、方言の絶対化につながっていったのである。(台湾は特殊な地域であって、大陸の各地方と同一には論ぜられない、とした黄石輝のことばを想起してほしい。) これに対して廖毓文らの主張は、矛盾のような実作経験の蓄積を欠いていた(台湾の近代文学全体がそうであった)せいもあって、もっぱら大陸との共通性の保持というところに、立論の根拠を置いてゆくことになった。ここでの彼らの立場は、いわば標準語論者の立場(方言を抑制して、教育による国語(中国白話文として意識された)の普及、統一を図る)であり、そこからは大衆の生きたことばをどう捉えるかという視点は出てこない。ここでもまた、文芸大衆化論への道は阻害されていたといえる。

大陸における文芸大衆化論争や大衆語論争(34年)と、台湾における議論との間に見られるこうしたねじれ(たとえば、プロレタリア文学を主張する廖毓

文らが、ことばの問題については国民党の国語政策と同じような立場に立ち、一島の改良主義の傾きを内包した台湾話文論者が、大衆語論者の立場に近い、といったような)の原因は、基本的には白話文運動における民族の契機と民衆の契機の矛盾ということで考えられるのではないかと思う。だが、このことについてはすでに詳述する紙数を失ってしまったので、以前書いておいたアウトライン<sup>27)</sup>を再提出し、若干の補足を加えるにとどめたい。

さて、白話文運動には民族の契機と民衆の契機の二つの契機がふくまれていたと考えられる。民衆の契機とは、民衆が自らの言葉で自らの意見を語りうる事が、旧社会を打ち倒し、侵略に対処するための必須の条件だとする認識のことである。中国の白話文運動はすでに1900年代に始まっているが、その最も早い時期の雑誌のひとつである『中国白話報』の「発刊詞」<sup>28)</sup>の作者は、中国の読書人にはもはや危機を救うだけのエネルギーはない。そのエネルギーを持つものは農民、職人、商人、兵士、童幼、婦女であり、彼らは自らの置かれた情勢を知りさえすれば、読書人のように無力ではないだろう、として、そうした層へ浸透するための手段としての白話文を提唱している。こうした民衆のエネルギーへの注目は、主体としての民衆への注目であり、瞿秋白らの大衆語の提唱は、こうした側面における白話文運動の延長上にあったものといえよう。

だが、白話文運動にはまた、「国語」の理念につらなる側面もある。封建王朝に代わる近代国家の形成こそが、帝国主義の侵略に対処する唯一の道である、とする認識が、その背景にはある。そして、近代国家を形成するには、その内実を支えるべき「国民」の形成が不可欠であり、封建治下の民衆が近代国家の「国民」として形成されるためには、その一人一人が自由に他と意志を通じあわせるための「国語」がなければならない。胡適が白文話による新文学の方向を、「国語の文学、文学の国語」というテーゼに集約した<sup>29)</sup>のは、そうした意味あいにおいてであり、これを白話文運動における民族の契機と考えてよいだろう。そしてこの二つの契機は、それぞれ反帝と反封建の二つの課題に対応することになる。

白話文運動におけるこの二つの契機は、民衆のなかにおける共通語の形成、定着という展望のなかで、総一的に把握されるものである。そして台湾における白話文の導入期には、こうした把握は、中国革命への合流による台湾の解放という展望のなかで理解されていた。台湾における白話文運動の提唱者の一人であった黄呈聡は、台湾語による白話文ではいけないのか、という問いに対してこう答えている。「われわれの台湾は独立の国家ではないから、背後に大きな勢力を持つ文字（中国語をさす——引用者）があって、われわれの文字の保存を助けてくれるのでないかぎり、遠からず別の勢力ある文字（日本語——引用者）によって、われわれの文字は消滅させられてしまうだろう。……（中略）……中国の白話文を研究し、徐々にそれに近づけ、同一のものとなるようにしていけば、われわれの範囲が中国にまで拡大するばかりでなく、何かやりたいことがあって中国へ行った場合にも、何ごとによらず便利である。みながこのように考えるなら、わが台湾は孤島であるとはいえず、大陸の気概を持てるのだ<sup>30)</sup>。」また、張我軍が胡適の「国語の文学、文学の国語」というテーゼを、「白話文学の建設、台湾語言の改造」というテーゼに敷衍したのも、同じ方向のもと考えられる。中国における共通語形成に積極的に合流してゆくことによって、浸透してくる日本語に抵抗してゆこうとする姿勢である。

だが、若林正文が指摘するように、27年前後を境に状況は一変する。台湾の抗日運動は、分裂ののちに全面的弾圧によって崩壊してしまう。また中国では国共内戦が始まり、中国ナショナリズムは混迷してゆく。こうして深い孤立感にとらわれた台湾の知識人にとって、「抗日」のテコたりうると考えられた祖国中国との「聯絡」も、今や渺遠たる理想に変わってしまう<sup>32)</sup>。

共通語形成への合流が、「渺遠たる理想」となり、民衆のことは（台湾語）が、それから切り離されていると感じられるとき、民衆の契機は民族の契機（「中国」という大きさでの「国語」の形成）と、乖離せずにはいられない。民族の契機の強調は、民衆の契機の無視につながり（廖毓文ら）、民衆の契機の強調が、民族の契機を否定し、あるいは別の形での民族の契機（「台湾」という大きさでの）を主張することにつながる（『南音』に潜在的に見られるよう

な) というように。

だが、民衆の契機の強調が、必ずしも直接民族の契機の否定につながるわけでもないことは、最初に引用しておいた黄石輝の、台湾話文と中国語の関係に関する説明などからも明らかだろう。そこにはさまざまな形でのニュアンスの差がありえたのである。だが、議論が大衆化論のほうへ進んでいかなかったことで、論争の進展は、「中国」との連絡を第一義に考えるかどうかという形で、民族の契機と民衆の契機の矛盾をきわだたせ、二者択一をせまっていくような方向へと展開されていったように見える。

雑誌『南音』は、論争のひとつの成果として誕生し、台湾話文の実践として民歌、民話の発掘を行い、民間文学再評価の機運を開き、また、30年代の文芸雑誌叢生の先鞭をつけるなど、いろいろな意味で高く評価されるべき雑誌であろう。だが、それはまた民族の契機を「中国」大から「台湾」大へととらえ返す動きを、比較的明瞭に見せた雑誌でもあった。例えば負人（莊遂性）は、「思うに台湾の大衆の日本語に対する需要は、中国語に対する需要よりも大きい。いくらかの日本語を学べば、目前の生活において、直接、間接の便利を得ることができる。では、中国語は！ 中国へ儲けに行こうとでもするのでないかぎり、無産大衆に遠大な将来を想うようなヒマがどれほどあろう」という。<sup>(24)</sup> これは明らかに中国大のナショナリズムの否定であろう。

また、葉米鐘は、「一個の社会集団は、人種、歴史、風土、人情などによって形成された共通の特性を持っている。このような特性は、階級を超越した存在である。それゆえ台湾人は、階級の一分子である以前に、台湾人としてそなえるべき一種の特性を持っている」として、こうした「全集团的特性」に立脚した文学、プロレタリア文学でも貴族文学でもない「第三文学」の創作を提唱している<sup>33)</sup>。これは若林もいうように、「『台湾話文』の主張に対応した『台湾民族文学』の提唱に他ならない」<sup>34)</sup>。そして、『南音』同人12名中の6名までが台湾自治聯盟の成員であったことを考えるなら、こうした「台湾民族文学」論の主張が、地方自治聯盟ふうの一島の改良主義と背中合わせのものであったことも、容易に理解できよう。論争の、あるいは台湾話文論の「大衆化」

の方向と対応させる意味で、こうした方向を「本土化」の方向と考えておくことができよう。

以上に述べてきたことから明らかなように、こうした「本土化」の方向を、論争の唯一の帰結と見ることはできまい。だがまた、それ以外の方向が、明瞭な結集軸を持たなかったことも事実であろう。問題はいわば持ち込されたのである。そして日本語のより一層の浸透は、問題に再度挑戦する余裕を台湾文学に与えなかった。そして、戦後の状況もまた。

戦後、国民党の強制的な国語政策のおかげで、現在の台湾の国語（標準語）の普及にはめざましいものがある。30年代とは状況が一変しているといっている。にもかかわらず、ここ数年また台湾語による創作が叫ばれはじめている。そして、ここでもまた「本土化」と「大衆化」の方向がからまりあいながら、事態が進展しているように見える。問題の根は深いのだ。本稿はいわばそのトバロのところで、いくつかの仮説を提出してみたにすぎない。

- 1) 葉石濤『台湾文学史綱』（文学界雑誌社、1982年2月）
- 2) 白少帆、王玉斌、張恒春、武治純編『現代台湾文学史』（遼寧大学出版社、1987年12月）
- 3) 松永正義、葉笛訳「台湾新文学運動研究的新段階」（第一回当代中国文学国際学術会議、1988年6月25・26日、於新竹清華大学、提出論文）
- 4) 敬「台湾話文討論欄」（『南音』1号、1932年1月1日）
- 5) 景印中国期刊五十種12~14、東方文化書局
- 6) 廖毓文「台湾文学改革運動史略」（『台北文物』3巻3期、4巻1期、1954年12月、1955年5月、のち、『日拠下台湾新文学 明集5 文献資料選集』、明潭出版社、1979年3月、所収）
- 7) 『台湾社会運動史』（竜溪書舎、1973年5月。本書は、台湾総督府警務局刊の『台湾総督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安状況（中巻）』の復刻版）第二章第五節
- 8) 同上、第三章第二節
- 9) 若林正文「台湾抗日ナショナリズムの問題状況・再考」（同『海峡——台湾政治への視座』、研文出版、1985年10月、所収）は郷土文学論争をネタのひとつとして、当時の抗日思想状況の適確な見取り図を描いており、教えられる所が多かった。『伍人報』、黃石輝と台湾共産党をめぐる周辺の構造については、同論文を参照して

ほしい。

- 10) 『台湾社会運動史』（前掲注7）第一章第六節
- 11) 前掲注9若林論文の注⑤に教えられた。
- 12) 栗原幸夫ほか編『資料世界プロレタリア文学運動』第四卷（三一書房、1973年9月）に、ドイツ、中国、朝鮮の文芸大衆化論に関する文章が集められている。
- 13) 中国における文芸大衆化論については、丸尾常喜「左連前期における文芸大衆化の問題」（『東洋文化』52号、1972年3月）、同「魯迅感應選集序言」の理論的前提——左連前期における瞿秋白文芸理論の位置」（『東洋文化』56号、1976年3月）、杉本達夫「文芸大衆化論の展開」（『目加田誠博士古稀記念 中国文学論集』、竜溪書舎、1974年10月）、島田由紀子「文芸大衆化問題と雑誌『大衆文芸』（『文化』39巻1・2号、1975年10月）が参考になった。
- 14) 平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、1963年12月）
- 15) 栗原幸夫ほか編『資料世界プロレタリア文学運動』第三卷（三一書房、1975年6月）に、この決議は収められている。原載は『戦旗』3巻11号、1930年7月。黄石輝論文の直前にあたる。
- 16) 蔵原惟人『日本プロレタリア文学大系 4 運動開花の時代』中巻解説（三一書房、1955年1月）
- 17) 「文芸大衆化問題座談会」（『大衆文芸』2巻3期、1930年3月）ただし、丁易編『大衆文芸論集（増訂本）』（北京師範大学出版部、1951年7月）所収によった。
- 18) 銭杏邨「大衆文芸与文芸大衆化」（『拓荒者』1巻3期、1930年3月）ただし、前掲注17『大衆文芸論集』によった。
- 19) 瞿秋白「普洛大衆文芸の現実問題」（『瞿秋白文集』、人民文学出版社、1953～54年、第二冊、所収。原載は『文学』1巻1期、1932年4月）なお、前掲注12『資料世界プロレタリア文学運動』第四卷に、訳が収められている。
- 20) ただし、1930年には台湾人児童の公学校就学率は3割を超え、日本統治末期には7割を超えていた。だが、それはまた日本語による浸蝕を示す数字でもある。（前掲注9若林論文参照）
- 21) 『台湾新民報』317号（1930年6月14日）には、「漢文研究会」が警察によって禁止されたという記事が見えるし、また、同じころ、蔡培火は台湾語のローマ字表記の普及運動を志し、「白話ローマ字講習会」の設立を当局に申請したが、国語（日本語）普及のさまたげとなるという理由で禁止された。（前掲注6「台湾文字改革運動史略」）
- 22) 前掲注6「台湾文字改革史略」
- 23) 反対論者のひとりであった頼明弘が、『南音』をブルジョアジーの援助を受けた

- 反動雑誌と呼んで、黄春成との間に応酬があった(『南音』6号、1932年4月2日、所載の「宣告明弘君之認識不足」)ことなどが想起される。
- 24) 前掲注19「普洛大衆文芸の現実問題」など。
- 25) 止敬(茅盾)「問題中的大衆文芸」(前掲注17『大衆文芸論集』所収。原載は『文学月報』1巻2期、1932年7月)前掲注12『資料世界プロレタリア文学運動』第四巻に、訳が収められている。
- 26) 魯迅「門外文談」(『魯迅全集』第六巻、人民文学出版社、1981年、「且介亭雜文」所収)
- 27) 前掲注3「台湾新文学運動研究的新階段」
- 28) 白話道人(林懈)「中国白話報発刊詞」(『中国白話報』第1期、1903年12月。ただし、張枏、王忍之編『辛亥革命前十年間時論選集』第一巻下冊、生活、読書、新知三聯書店、1960年4月、収録によった)
- 29) 胡適「建設的文学革命論」(『胡適文存』第一巻卷一、亜東図書館、1921年11月)
- 30) 黄呈聡「論普及白話文的新使命」(『台湾』4年1号、1923年1月)
- 31) 張我軍「新文学運動的意義」(『台湾民報』67号、1925年8月26日)
- 32) 前掲注9「台湾抗日ナショナリズムの問題状況・再考」
- 33) 奇(葉栄鐘)「第三文学提唱」(『南音』8号、1932年6月13日、巻頭言)
- 34) 前掲注9「台湾抗日ナショナリズムの問題状況・再考」

(一橋大学助教授)